手と手と手

岡山発 国際貢献

KEEP（京山の挑戦5）

「終わっちゃあいけん」

課題

参加者は合計三百六十人。温暖化の原因となる二酸化炭素の削減量は約一・四トン。

二月十八、十九の両日、岡山市伊島町の京山公民館で開かれた第一回ESDデー・フェスティバルで、地球温暖化防止対策の一環として取り組んだ「チャレンジシート」運動の結果が報告された。

電気や水の節約など十項目を、住民有志が十日間実践した成果だ。しかし、参加者数は京山地区の人口約二万四千人のわずか1・5%。しかも七割近くは小中学生で、大人の参加は少なかった。

公民館主催講座の環境改善活動（KEEP）を地域全体に広げるためのフェスティバルであり、運動だったのだが。

「地域のみんなでESDに取り組む意義をどう考えていますか」

二日目の総合討論会で、京山中二年の守本祐一はこう切り出した。

昨秋、科学部長を後継し、KEEPをリードする。自分と地域のつながりが強くなった。地域に自分と同じ思いを持つ人がいることを知った。でも、環境が良くなった実感はない。少し行き詰まりを感じている。

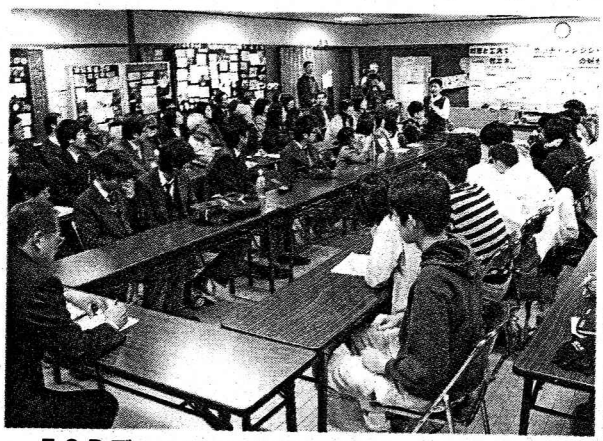
小学生から高齢者まで世代の違う参加者が次々に発言を求めた。「異なる価値観を伝え合える」「みんながいろんな知識を共有できる」…。

津島小六年井上宙紀は「小学校は小学生だけ、会社だと会社員だけになるけど、地域のいろんな人が知恵を出し合えばより良い活動ができると思います」と語った。

守本はそれぞれに共感しながらも本音を口をする。「でも現実には、いろんな団体が一緒に活動を続けるのは難しい」

三宅貴久子・津島小教諭（四九）が立ち上がった。「子どもは先輩の生きざまを学んでいる。KEEPの価値は大きい。でも…」。かわり続ける中で課題も感じている。「熱心な教師が転勤するだけで、学校と地域の連携は危うくなる。使命感だけでは持続しない。続けるためのシステムが必要です」

これまで思いを持つ人が集まり、取り組んできた。中学校は主に部活動として参加するが、小学校は教師がボランティアで子どもを引率して参加する。いずれも負担は一部の教師に偏っている。一方、地域の中に指導者が育っているわけでもない。KEEPの持続可能性が問われている。



ESDデー・フェスの総合討論会。大人も子どもも60人余りが集い、活発に意見交換した＝2月、岡山市京山公民館

地域の文化に

三月下旬。公民館で開かれた反省会で「KEEP改革案」が配られた。高校生メンバーが中学生をサポートしていく新体制が書かれていた。

まとめたのは、今春、高校生になった前科学部長の幸谷勇作。仲間と話し合って決めたという。「ぼくらが頑張ってKEEPを地域の文化にしよう」と語る岡山工業高二年松本和樹の思いも反映されている。

大人の反省会は公民館近くの居酒屋で続いた。岡山ビデオクラブ会長の野口武志（七〇）はビールを手に語り始めた。

「ESDのことは、よう分からんのじゃけど」

一九四五年、伊島小学校時代に空襲で家を焼かれ、今は岡山市郊外に暮らす。KEEPを撮り続けている。仕上げた作品は全二十本、合計二百七十三分十九秒。

「『END』や『おわり』じゃいけん。KEEPは終わっちゃあいけんと思うんよ」。新作DVDのラストシーンを、野口はこの言葉で飾った。

「がんばれKEEP」

（敬称略）

第6部 地域で動く ⑥

ご意見をお寄せください。〒700-8734、山陽新聞「国際貢献取材班」。ファクス（086-245-5296）、メール（kokusai@sanyo.oni.co.jp）。